

1 生贄として魔王の住む国に行くことになりました

「お前が生贄として連れてこられたのだ。生贄らしくこの俺に奉仕するのだ。」

長年、人間たちの国、エバンスは魔族の住む国と敵対してたのだが、急に、魔族側からエバンスの王女を生贄として差し出せばもう攻撃しないと休戦の申し出がされたのだ。エバンスにいる王女は♫人。王の第一王妃の娘〜人と第二王妃の娘一人と、王が最も愛していた下町の愛人の娘の♫人である。

「集まったな。お前たちもすでに知ってると思うが、魔族の国から条件付きで今までの人間の行いを許し、今後一切攻撃しないという提案がされたのだ。その条件というのは、この王国から姫を生贄として差し出すことだ。我が国には♫人の姫がいる。私も選びたくないが、この国を守るためには仕方ない。」

ほんの少しの沈黙が流れた後、

「マリア。お前が生贄となりなさい。」

「はい。」

誰が見ても異常とわかる空気が流れていた。マリア以外の人間は他人事のような態度で

ある。まるで自分は選ばれないとわかっているかのような態度だ。

（最初から私を選ぶと決めていたくせに。他の姫への見せ物にしてるみたいね。ここにいても地獄のような扱いをされてたのだから、今更生贄なんて驚かないわ。むしろその方がいいのかもしれないわね。）

マリアは下を向いたまま誰にもわからないほどの小さな笑みを浮かべた。

「3日後、魔族と人間国の境界で落ちあうことになっている。侍女とともに出発の準備を進めなさい。以上！」

王が去った後、他の姫はマリアを見てくすくすと笑いながら部屋を去っていった。

（もう何も思わないわ。生贄として殺されてしまうとしてもここを出られるというだけでほんの少し心の曇りが晴れる気がするわ）

「マリア様、出発のための準備が出来ましたので、こちらに荷物を置かせていただきます。明日の朝、出発いたしますので、それまで待機をお願いします。」

小さなカバン一つにしかない荷物。生贄なのだからこんなものかと妙に納得する。お父様が寄越した侍女は一人で最低限の用件を伝え、出ていった。小さい頃から過ごした塔とお別れねと、部屋と思えないほど苔の生えた壁を撫でる。無意識に緊張してるのだろう

か、窓から見えていた三日月が、いつの間にか見えなくなるほどの時間が経っても眠れなかった。少しでも休めるように目を瞑ると、自然と今までの生活が走馬灯のように流れてくる。王である父が愛してくれていたのは私を産んだ母が生きている間だけだった。母が病気で死んでしまうと私の存在は父の中でないものとなっていった。父から寵愛を受けていたが愛人という存在であった母を憎んでいた他の王妃たちからも復讐かのように虐められ、王宮から離れた塔に追いやられた。外に出ることも逃げ出すこともできなかった。安らぎとなるのは、開いた窓からくる動物たちだけだった。彼らは私に森でくれた木の实や可愛らしい花をプレゼントとしてくれた。彼らがいたからこの狭い塔の中でも安らぎを感じて生きていられたのだと思う。辛い思い出ばかりだったが、ほんの少しの安らぎの思い出もある。心が穏やかになり、マリアは眠りにつくのだった。

窓から日が差し込み、自然と目が覚める。いつからか朝の習慣になっていた鳥たちのあいさつで意識がはつきりとする。

「あなたたちに伝えないとならないことがあるの。私は今日ここを出ていくの。あなたたちとの別れは辛いわ。でも、いつまでも、ここで触れ合ったあの時間は忘れないわ。どうか元気でいてね。」

まるで言葉がわかるかのように、鳥たちは、マリアの肩や頭に自信の顔をすりすりとし、擦り付けていた。鳥たちを窓から逃しているとコンコンと扉が叩かれる。

「どうぞ」

「失礼します。出発の準備にまいりました。」

白のワンピースにほんの少し金色の刺繍が施されたワンピースを着させられ、頭からは白いベールを被せられた。

（そうよね。生贄には姫をよこせと言われてるのだから。それなりの格好をさせないとどうでもいい姫を送ったとバレてしまうもの。）

王宮の裏口に用意してあった小さな馬車に乗り込んで、誰かに見送られることなく出発した。侍女もつかず、ついたのは馬車をひく従者と見張り役兼引き渡し役の騎士二人である。魔族と約束の国境沿いまではわりと近く、2日あればついてしまう。期待も絶望も抱いていなかったマリアは、初めて見る外の世界に興奮していた。

（木々が生い茂っていて空気がとても気持ちいいわ。このまま逃げ出してこの森で一人死んでいきたい。）

道中何度も考えたことだ。しかし、マリアがそうしなかったのは、何の罪もない国民を苦しめることはしたくないと思っていたからだ。自分が生贄となり、魔族の国に行くことは

国民を救うことにつながると思った。自分一人の命でそれが叶うならそれでいいと思った。「マリア様、そろそろ国境沿いに着きますので、降りる準備をお願いします。」

「ええ、わかったわ。ありがとう。」

道が開けたのもうそろそろかと、窓から顔を出し、馬車の進む方へ目をやると数人、人が立っているのが見える。隣を歩く騎士たちの緊張が伝わってきて、あれが人ではなく、魔族であるとわかる。

「お待ちしてました。それでは生贄の姫を引き渡してもらいましょう。」

一番初めに声を発した魔族は、まるで人間のような人だった。まるでとか魔族と言われなければわからないのでは？というほど見た目が整っていた。鼻筋が通っていて、目は、ぱっちりした二重だった。背は高くて少しがっちりしてる印象だった。後ろに控えている魔族は耳が尖っていて、肌も褐色が強くて言われなくても魔族とわかる感じだった。（なぜかしら。全然怖くないわ。人生どうなってもいいと思っているからかしら。）

「……はい。エバンス王国のマリア様です。」

「マリアです。この度は、条件付きで戦いをやめてくださることで、提案ありがとうございます。ございます。あの、」

「はい？何でしょうか？」

「約束はきちんと守って頂けますよね？」

「もちろんです。約束を守ると信用していただくために契約書を用意しました。」

「そうですか。ありがとうございます。」

マリアは契約書を念入りに確認し、騎士たちに忘れず、王に届けるように指示した。騎士たちは逃げるように去っていった。

「では、我々も行きましょうか。マリア様」

向けられる笑顔が余計に人間味を感じさせる。生贄とは思えないようなエスコートをされて馬車に乗せられる。もっと汚い荷台にでも乗せられると思っていたので拍子抜けしてしまう。馬車も王宮から乗ってきた馬車の二〇倍くらいいいもので、周りには白と金色で装飾され、中はふかふかのクッションで埋め尽くされていて、なぜか外観からは想像もできないくらい広い。あまりの広さに驚いていると、

「空間魔法が施されているので外観と中の広さが一致しないんですよ。」

「……そうですね。」

「私は、魔王様直属の従者、ミリアムと申します。魔王城まで一時間ほどで着きますから少しの間ですが、居心地の悪い馬車で我慢してください。」

「居心地が悪いなんて……」

（本当に生贄として連れてこられてのよね。生贄ってこんな良い待遇を受けるものなのかしら。魔族の国と人間の国では生贄に関する考え方が違うのかしら。）

魔王城を目指し、森の中を走っているが、所々視線を感じるのだ。窓の外を見ると、見たこともない禍々しい液体を垂らした奴らがうじゃうじゃいることに気づき、マリアは顔を顰める。

「安心してください。この馬車は強い結界が張られていますから、奴らが近づいてくることはありません。」

（気づいたら説明してくれるのよね、この従者。）

「森を抜けたので魔法で少し飛ばしていきます。外の景色が目まぐるしく変わるのであまり見ないようにしてください。」

「わかりました。」

マリアはミリアムに言われた通り、外を見ないように、膝に乗せた手元を見つめていた。「マリア様、着きましたよ。魔王様が待っていますので先にこちらへお願いします。」

「はい。」

ミリアムの後ろへピッタリついて、魔王城の中へ入っていく。

（ここで殺されるのだろうか。それとも生き地獄で、邪悪な魔族たちの餌食になってしまうのだろうか。）

「こちらです。あまり緊張なさらなくて大丈夫だと思いますよ。」

そんな信用のない言葉をかけられ、魔王のいると思われる部屋の大きな扉が開けられた。

「お前はエバンズ国の生贄か。生贄は生贄らしくこの国で大人しくしている。」

「……殺さないのですか？」

「生贄だが、殺さない方がこちらに色々メリットがある。殺しはしない。おい、生贄を部屋に案内しろ。」

「かしこまりました。マリア様、こちらへどうぞ」

王の後ろについていたメイド服姿の女性？が前へ出てきて、マリアを部屋へ案内し始めた。

「今日は長旅で疲れたでしょうから、お休みできる部屋へご案内しますね。魔王城はとても広いので明日ゆっくりご案内します。」

「わかりました。ありがとうございます。」

魔王城の中は本当に魔族の国なのかと疑うほど煌びやかだった。マリアは外に出たことがないので噂や人間の書いた本でしか魔族の国を知る方法がない。噂や本には魔族の国は



禍々しい空気に支配されていて、薄汚い環境だとされていた。自分の目で確かめないとダメね、とマリアは一人思った。魔王城の豪華さに驚いているうちに部屋へついたようで、メイド姿の女性が扉を開けてくれる。

「こちらです。どうぞ」

「……本当にここがわたくしに与えられた部屋ですか？何か間違っていないですか？」

「間違っていないです。ここが魔王様から指示されたお部屋です。疲れたでしょうからすぐお湯の準備をしますね。お部屋でお待ちください。」

何も言わせないというような早口で話し、去ってしまった。

（どういふことなのかしら……こんな豪華な部屋おかしいわ。でも、あの女性に言っても聞いてくれる雰囲気ではないし、きっと魔王様が気づくわよね。）

「マリア様、お湯の準備ができましたのでお手伝いさせていただきますわ。」

（お手伝いって何なのかしら！？）

「侍女ですので恥ずかしがらず裸になってください。」

「……大丈夫ですわ……生贄の分際でお手伝いしていただくなんて……自分で洗います……」  
「マリア様、この国では侍女が湯浴みの手伝いをするのは当たり前のことですわ。」

（当たり前のことなの……私は生贄の分際なのだし従うしかないわ……裸を誰かに見られ

るなんて恥ずかしいけど、

「当たり前のことなのですね。わかりましたわ。お願いします……ところであなたのお名前を聞いてもいいのかしら？」

「リアです。マリア様。本日からマリア様付きの侍女になりましたのでよろしくお願いしますね。」

最初に放っていたオーラがいつからか消えて柔らかい雰囲気の侍女になっていた。

（私に侍女がつくなんて、リアは可哀想だわ……）

「こんな私の侍女になってしまふなんて……ごめんなさいね、リアさん」

「マリア様、私はマリア様の侍女になれてよかったですよ、それに侍女なんですから敬語もやめてください。」

「わかったわ。リア。ありがとう」

「さっ！湯浴みしましょう！お洋服脱いでこちらの部屋へお願いします。」

「……わかったわ」

人間の国では他人に裸を見られるのは醜い行為を言われていたので恥ずかしさといけなという気持ちでいっぱいだったマリアだったが腹をくるしかなくと裸になり、湯浴みができる部屋へ足を進めた。部屋は湯気で温かくなっていて、石鹸のいい香りがした。

「マリア様、こちらへお入りください。」

「ありがとう」

温められたお湯はとても清潔で、生きてきた中で一番気持ちよかった。一日の疲れが嘘のように取れていく。

「ゆっくりなさっていてください。私は隅々まで洗わせていただきますね」

「え！？洗うのはいいわ！自分でやるわ……！」

「マリア様、清潔に保つよう、魔王様に言われていますので私どもに洗わせてください。」

「そう、魔王様に言われたのね……」

魔王様の指示であれば仕方ないと納得するマリア。マリアが納得したのを確認してリアはマリアを頭から順番に洗っていく。

（人によって貰うってこんなに気持ちいいのね。）

「お耳を洗わせていただきますね。このスライムは害がなく、垢を取ってくれるので安心して身を任せてください。」

初めての湯浴みで気持ちよくて意識がとろんとしているマリアはリアに信頼を感じ始めていて、適当に返事をしていた。

「んっ！！な、に！耳が……！」

「大丈夫ですよ。お耳の中を少しクチュクチュするだけですから。」

と、リアに両手を握られて仕舞えば、耳の中に入ってきたスライムを取ることができなくなる。

「んあ！」

（耳の中が……ゾクゾクする……）

「ん……まだなの、？リア、お願い……もう」

「初めてなのでもう少し頑張ってお耳の中、綺麗にしましょう。」

（何だか、ゾクゾクして……おかしいわ……こんな気持ちになったことない……変な声を出さないように我慢しないと……）

懸命に我慢するせいで、マリアの目には涙が溜まり始めていた。

（マリア様はとても敏感なのね。魔王様に報告しなくては。それにしても、どこもかしこも白くて美しいわ。）

「マリア様、とても綺麗になったと思いますわ。次は、お身体を洗わせてくださいね。」

「、終わりかしら??」

「はい。こちらの椅子に移動していただけますか？」

湯船の近くにある小さな椅子に移動しようとするが、マリアの体は少しビクビクしてる。

リアに支えてもらいながら何とか移動した。

（お腹の中がキュンキュンするわ……この感覚は何なのかしら……）

「では失礼します。」

たっぷりとした柔らかい泡が背中につけられ、どんどん広げられていく。リアの手慣れた手つきで腕、脚はどんどん綺麗になっていく。旅での汚れがどんどん落ちていくようだ。こんなに高そうな石鹸を使ってくれるなんて魔族の国はともにお金を持っているのね。そんなことを考えているとリアの手はいつの間にか胸を洗い始めていた。

「ひゃっ！！」

「マリア様はとても豊満な方なのですね。服の上からだとわかりませんでした。乳首も真っピンクで可愛いのですわ」

「んっ……そこはダメだわ……」

「隅々まで洗わないとダメですよ。これから毎日洗うことになるのです。たくさん触ってもらって乳首への刺激に慣れましょう。」

リアは、口を手で押さえて初めて与えられる刺激に懸命に我慢しているマリアの乳首の淵を念入りに擦ったり、摘んでコリコリと動かし、刺激していく。

「ふっ、んん。ふぁ……………だめえ」

（何これ……胸の先を刺激されるとお腹のキュンキュンが激しくなる……）

「胸は綺麗になりましたね。」

（はあ、はあ、はあ、終わったのかしら……）

「最後は、こちらですね。さあ、マリア様、あしを開いてください。」

「ここはむ、り、よ………恥ずかしくて……お願い……自分で洗わせて……」

「ここが一番汚れが溜まりやすいのですよ。しっかり侍女に洗ってもらわなければなりません。さあ、マリア様。」

後ろから艶やかな声で耳元に囁かれて、従うしかないような気持ちになった。

（でも……本当に恥ずかしいわ……誰にも見せたことがないもの……）

「申し訳ありません、マリア様。こちらにきたばかりでまだ誰も信用できませんよね……ですが、信じてください。私は、マリア様に酷いこともしませんし、お慕いしております。どうか、わたくしを信じて全てを曝け出してくださいませんか？」

目の前にきて、綺麗な目で見つめられれば信じる以外なかった。リアの見た目も人間に近く、怖さを感じなかったのは大きいかもしれない。

「わかつ、たわ……。」

マリアは恥ずかしさで目に涙をいっぱい溜めながらもゆっくり足を開くのだが、無意識

に手で隠してしまう。リアは何か言葉を発するでもなく、そっと手を握ってマリアの太ももへ移動させた。

「このまま動かないでくださいね。」

そういうと、リアは体を洗った泡より、少しヌメヌメしたような液体を手につけ始めた。

「先ほどの泡とは違うのね？」

「はい。秘部はデリケートなので、刺激の少ない石鹸で洗います。初めての感覚でびっくりしてしまうかもしれませんが、お肌にとってもいい成分が入ってますし、とても気持ちいいと思いますのですぐ慣れますよ。」

マリアを不安な気持ちにさせないために優しい笑顔で液体の説明し、秘部に塗っていく。

「ふっ、んんん……」

初めての感覚にビクビク体を揺らすマリア。

（なに、これ……！！だめえ……ヌルヌルが……）

「マリア様のクリトリスはピンクでとても可愛らしいですね。」

「くり、とりす??」

「……はい。このことをクリトリスというのですよ」

リアは、少し驚いた表情をしたが、すぐ笑顔に戻った。前方の鏡にマリアが映るように

横に移動し、指で秘部を開く。

「いやっ……なにをするの……!」

「鏡を見てください。クリトリスはこの豆のような小さな部分ですよ。マリア様のクリトリスはピンク色でプルプルしていても綺麗です。」

（きれい……私の体が……??）

「クリトリスは垢が溜まりやすいので皮の中までゴシゴシしましょうね。」

リアは、先ほどと同じ位置に戻り、片手で秘部を広げ、もう片方の手でクリトリスを優しく触り始めた。

「初めてで刺激が強いかもしれませんが、我慢してください。」

（今までの刺激と全く違う……!!ビクビクして脳がおかしくなってしまうそう……）

「ふう……ん………」

リアによって、クリトリスの周りの皮は念入りに洗われた。時々皮からでたクリトリス部分に手が当たってしまい、体をビクビクさせるマリア。

「んあ……ああ……だめえ、」

（なにか、きそう……だめ、っ……）

急に何かが迫り上がってきそうだと、力を入れた瞬間、リアの手は離れていった。



「たくさん我慢していただきありがとうございます。とても綺麗になりましたよ。」

温かいお湯で全身の泡を流してもらい、用意してあった部屋に着替えた。用意されていた部屋着もふわふわの生地で気持ちいい。

「マリア様。お腹は空いていますか？空いていれば夕飯の準備をしますので。疲れていておやすみになりたいのでしたら遠慮なくおっしゃってください。」

「ありがとう、今日は先に休ませてもらっても良いかしら？」

「かしこまりました。また明日、朝の準備のためにお部屋に参りますので、よろしく願います。それでは、おやすみなさい。」

「ありがとう。おやすみ」

（今日は本当に疲れたわ……明日からどうなってしまうのかしら……）

ふかふかのベッドに横になり、今日の出来事を振り返ったり、今後のことを考えようと思っていたが、睡魔はすぐやってきて、眠りについてしまった。毎日隅々まで洗われることになるマリア、発散されない欲は蓄積されるばかりになってしまう。

リアは魔王のいる執務室にいた。

「リア、マリアは大丈夫だったか？」

「はい。疲れてしまったようでお夕食は召し上がりずにおやすみになりました。」

「そうか。よく見てやってくれ。」

「わかっております。マリア様はとても敏感な方でいらっしやいました。それに、性の知識があまりないようです。」

「……そうか。人間界は性欲をあまり良しとしない文化があるからな。マリアは塔に閉じ込められていたし、特に性に関する知識は乏しい。あまりいじめるなよ。」

「はあ、虐めるなどしません。しかし、マリア様をずっと性から離していたら魔王様と進展しませんよ？ やつとの思いでマリア様をこちらの領地まで連れてきたのに」

「わかってる。しかし、あまり焦るとマリアに嫌われてしまうかもしれないだろう？ もっとゆっくり進めなければならん。」

「はあ、わかりました。」

リアと魔王がこんな会話をしているとは知らず、マリアはぐっすり夢の中なのだった。

## 2 初めての快楽

カーテンの隙間から入る光が気持ちよくて、マリアはスッキリ起きられた。

「ふぁぁ。」

いつものように、背筋を伸ばして体を起こす。

「何時かしら？ぐっすり寝たわ」

体を動かしたことで意識がはっきりしてきた時、大きな扉が叩かれた。

「どうぞ」

「おはようございます、マリア様。よく寝られましたでしょうか？」

「ええ、ベッドがふかふかなのでとてもよく寝られたわ。あの……マリア？」

「なんででしょう？？」

「マリアは知っているかと思っただけで、私は人間で、生贄で連れてこられたの、……の待遇は間違っているのではないかしら……」

「いいえ、魔王様からの指示通りのお部屋をご案内してますから間違いではありません。」

また、ピシャリと言われてしまい、もう何もこのことに関しては、聞けなかった。

「そろそろ朝食の準備ができますので、お洋服など準備させていただいてもよろしいですか？」

「ええ……」

爽やかなパステルブルーがメインで、レースが優しいクリーム色のワンピースが着せら

れた。人間の世界にいた時でさえこんな上質で可愛い服は着たことがなかった。ブラウンのふわふわ髪の毛も綺麗に結い上げられた。

「魔王様がお待ちです。こちらへ」

「ええ……！生贄の分際なのに魔王様と一緒に朝食をとるのかしら……」

（ここに來てから、混乱するばかりだわ）

開かれた扉の先には、長い豪華な長机が置いてあり、一番奥の誕生日席に魔王様が座っていた。

「マリア様、こちらです。」

リアが引いてくれた椅子は、魔王の真隣だった。

（隣の……！？魔王様から一番遠い席に座らされるものだと思っていたわ。）

「お、おはようございます……魔王様、こちら失礼します……」

リアが椅子を引いてくれたので拒否できず、近くで魔王へ挨拶をすると、

「ああ、座ってくれ。」

「リア、ありがとう。」

「いえ。」

静かに食べ始めるが、マリアの頭ははてなでいっぱいな状態である。

「魔王城はどうだ？ なにか困ってることはないか。」

「……ありません。あの、この待遇は本当に魔王様のご指示なのでしょうか……お部屋もとでも豪華で……生贄で連れてこられたのに……と思ひまして。」

「困ってることがないならいい。生贄なのだから殺さなければならぬという条件はないだろう。それに、お前を殺したことで、向こうがごちゃごちゃ言って戦いを仕掛けてくるかもしれないからな。」

（ほう、そんな考え方もあるのか……）

「そう、ですか……私はただこのお城にいればいいのでしょうか……」

「そうだ。ただ、この城から逃げようとは思うな。逃げたらわかってるな？」

「……！！！！はい……逃げようだなって！ そんなこと思ってません、！」

「そうか、ならいい。困ったことがあればリアに言うといい。ここの朝食はどうだ？」

「とても、美味しいです……」

「好きなものはなんだ？」

「好きなものですか……パンとかですかね。」

（どうしよう……向こうにいた時、いつも固いパンに冷たいスープしか食べてないから

わからないわ)

「……………そうか。」

「魔王様、そろそろ出ないと間に合いませんよ。」

そばに控えていたミリアムが魔王の近くに寄って声をかけた。

「そうか、ではまた夕食の時に会おう。」

と言うと、魔王様はあっという間に去っていった。

「ミリア様。朝食も食べましたし、お部屋に戻りましょうか。」

「……………ええ、」

「マリア様は、あちらの国にいた時何をして過ごしていたのですか？」

「そうね、読書をして過ごしていたことが多かったわ。」

(基本塔の中に閉じ込められていたから読書しかできることがなかったのだけれどね……塔の中にある本はほんの少ししかなかったし、毎日同じ本を読んでいるだけだったけど)

「読書ですか。魔王城にも大きな図書室がありますよ。行ってみますか？」

「!!!! いいの……かしら、??」

「はい。魔王様からお城の中なら自由にしていいいと言われていますので。お城の中を案内す

るついでに何冊か本を選んでお部屋で読んだりするのはどうですか？」

「とても、魅力的だわ、！」

「よかったです。少ししたら迎えに上がりますので、それまでゆっくりしてお待ちください。」

新しい本に出会えることや、気になっていた魔王城の中を見られると聞いて興奮したマリアは自分が生贄で連れてこられたことを忘れかけていた。

「マリア様、そろそろいきましょうか。」

「ええ！」

リアは、大まかにこんな部屋があると言うことを歩きながら教えてくれた。どの部屋もとても綺麗だった。それに、城の中で働いている魔族たちはみんな礼儀正しくて、すれ違うたびに話しかけ、軽く挨拶してくれた。

（私はいったいどういう存在だと思われてるのかしら……）

「マリア様、図書室にきましたよ」

「とても、広いのね！！何を読んでもいいのかしら？」

「ええ、好きなものを選んでいただいで大丈夫ですよ。マリア様はどういった本が好きなのですか？」

「そうね。本が好きといっても、私がいた場所の図書室には本が少なかったの。私の住んでいた国の歴史とか、哲学的な本しかなかったわ。」

「そうなのですね。ここの図書室には様々な種類の本が置いてありますから色々楽しめると思いますよ。」

「そうね、でも、これだけたくさんあると、何を讀もうか迷うわね……」

「そうですね。恋愛小説はどうですか？この本は魔族の間でも最近流行の本ですよ。」

「そうなのね。讀んでみようかしら。」

マリアはリアのおすすすめを参考に何冊か選んで、部屋に戻った。

（リアがおすすすめしてくれた恋愛小説、面白すぎるわ……恋愛とはこういうもののなのね）  
「ふう、結構集中して讀んだわね。ここの夕日はとても綺麗ね。」

窓から差し込む夕日が綺麗で、すこしの間ボーとするマリア。夕飯の時間になり、朝と同じようにリアが呼びにきてくれて、移動した。

「お待ちせして申し訳ありません、魔王様」

「いや、気にしないでくれ。さあ、食べよう。」

（お忙しそうな方なのに、夕飯も一緒に食べてくださるのね。監視の意味もあるのかし



ら

「今日は何をして過ごしていたのだ。」

「お城の中を案内してもらって、図書室で本を借りさせていただきました。」

「ほう、本が好きなのか。」

「……はい。」

「どんな本を読むのだ」

「リアがお勧めしてくれた恋愛ものの小説がとても面白くて……」

「そうか。」

食事の間も無言になる時間の方が少ないのでは？というくらい魔王はマリアに話しかけていた。魔王からおすすめの本や、魔王城の絶景スポットなどを聞いて、時折笑顔が溢れるマリア。生きてきて初めて団欒の食事というものを感じたようだった。

「この後時間はあるか？」

「……？この後ですか？大丈夫ですが。」

「そうか、庭園をまだ案内されてないだろう？夜に歩くと月光で綺麗だ、案内しよう。」

「お忙しいではありませんか？生贄の私如きにお時間を割いていただくなど……」

「……気になるな。」

魔王はそそくさと部屋を出て行ってしまった。リアは、庭園はとても綺麗ですから穏やかな気持ちになれますよ、と羽織物をマリアに渡して出ていった。

（魔王様は一体何を考えているのかしら……）

「マリア、庭園を案内しよう。」

「……はい。今行きます。」

庭園は見たことない花々が月光に照らされてキラキラしていた。庭園の真ん中に行くために長い階段を降りる。

「きゃっ」

階段が後少しで終わるところでマリアは足を滑らせてしまった。

「大丈夫か？」

痛くない、と思い恐怖で閉じてしまった目を開けると魔王が軽々しく横抱きにし、支えてくれた。

「……も、申し訳ありません……!!」

「いや、私も手を貸せばよかったな。このまま連れて行ってやろう。」

魔王はマリアを降ろすことなく、真ん中にある可愛らしいソファへと運んでくれた。

「あ、ありがとうございます。」

向こうの国で全く男性と触れ合ったことがなかったマリア。男性とはこんなに固くて力持ちなのかとドキドキしていた。

（心がバクバクしているわ……）

夕食時のような会話をして、部屋に送ってもらった。たくさん歩き回ったことで、マリアはベッドに入るとすぐ眠ってしまった。それから朝、夕のご飯は当たり前と一緒に食べ、夜は時々、庭園での散歩に誘ってくれた。

「これは、何かしら。」

「魔王様からのプレゼントのようです。」

「こんなに……？ただけないわ。」

「マリア様が読んでみたいと言っていた本もあるみたいですよ？受け取っておいたらよろしいんじゃないでしょうか？」

（私は読みたいと言っていた本を覚えてくださっていたのね。）

「そう、ね。ありがたく受け取ろうかしら……」

「そろそろ、朝食の時間ですね、移動しましょうか」

「ええ、そうね。」

魔王はいつもマリアより先にきて、仕事をしながら待っているのだが、マリアの足音が聞こえた瞬間に書類をしまうのだった。普段絶対見られない魔王の様子にミリアムは後ろでくすくすと笑っているのだった。

「おはようございます。魔王様。あの、プレゼントありがとうございます。」

「ん？ ああ、気に入ってくれたならいい。今日は遅くなるから夕飯は一緒に取れないんだ。すまん。」

「そう、ですか……わかりました。お仕事頑張ってください。」

「ありがとうございます。」

朝食を終え、マリアはどこにも寄り道することなく部屋に戻ってきた。

（魔王様がくれた本読もう）

「『純情な愛』、あ、これも気になってた本だわ！ これだけ表紙が全然違うわね、恋愛小説なのかしら？ リア」

「どうかしましたか？」

「この本知ってるかしら？ 魔王様がプレゼントしてくれたのだけれど、他の恋愛小説と表紙が違うから恋愛小説なのか気になって。」

「ほう。この本ですね。マリア様には少し早い気もしますが、そろそろいい時期でしょう。」

「何かしら？少し聞こえなかったわ」

「いえ！この本も、魔族の女の中では人気ですよ。まあ、恋愛小説の分類になるでしょうか。」

「そうなのね、読んでみることにするわ。」

リアが用意してくれた紅茶を飲みながら魔王様がプレゼントしてくれた本を読む。

（な、に、これ……何なの、この本。恥ずかしすぎるわ……！！く、クリトリスを舐め回す！？この男女は一体何をしてるの！？）

マリアの読んでいた本は官能小説だったのである。親に売られて強制的に結婚させられた男女が色々壁を乗り越えて、恋人になる物語なのだが、セックスのシーンが生々しくて魔族の中でも人気なのであった。マリアは未知の世界にのめり込むようにエロ小説を読み進めた。

（とても変態だわ……！男女の交わりとはこうやって行うのかしら……！でも、なぜなのかしら、この本を読んでいると魔王様の顔がチラついて、お腹がキュンキュンしてしまう……あの大きな手で包まれたと思うってしまう……どうしたのかしら……）

「マリア様？まだ本を読んでいるらしいやつたのですか？休憩を挟みながらじゃないと疲れてしまいますよ。」

「もうこんな時間なのね……！お夕食かしら？」

「はい。移動しましょう。」

魔王様がいない夕食で少しでも楽しめるようにという使用人の気遣いがあるのか、マリアがこの城にきて美味しいと言った料理ばかりが出てきた。

（本当にこのカボチャのスープ美味しいわ。それにしても）人の食事はこんなにつまらなかったかしら……いつも魔王様が色々なお話をしてくれるからかしら……）

いつもより夕食を早く食べ終えたマリアは、部屋に戻って本の続きを読んでいた。

「マリア様、湯浴みの準備ができました。」

「もうそんな時間！？今日は時間が過ぎるのが早いわね……」

あれから毎日リアに体の隅々まで洗われてるマリア。毎日洗われれば、刺激になれるとリアは言っていたが、マリアは全く刺激に慣れた感覚がない。毎日毎日、快感に泣かされ、湯浴みの後はぐったりである。しかも、絶頂し、快感から解放されるわけでもないからさらに辛いであろう。リアが魔王から絶頂させないようにと指示されているというのはい部の魔族しか知らない。

「今日はいつもと違う乳液を塗りましょう。こちら魔族の女の中で人気のものなのでですよ」

「ん……そう、なの……？とても可愛らしい入れ物ね。いつものやつと何が違うのかしら」  
「こちら、媚薬というものですわ。肌が綺麗になれて、とても気持ちいいですよ。」

「そう……何だかとても高価そうなものだけれど私に使ってもいいのかしら？」

「ええ、もちろんです。これを塗ってさらに綺麗で魅力的な女性になりましょう。そうすれば魔王様も……おほん」

「ま、おう、様、も……？」

「いえ。さあ、塗り終わりました。」

「んん……あり、がとう。」

月明かりに照らされたベッドの上から半月をぼーと見つめる。

（何度リアに洗ってもらってもあの刺激に慣れないわ……それに、今日は何だかいつもと違う。体がうずうずして全く眠れないわ……）

眠れないから厨房でホットミルクでももらおうとマリアは薄着で部屋を出た。

（魔王様の執務室、明かりがついてるわ。まだお仕事してるのかしら。）

「今日マリ……夕飯と一緒に取れなかつ……と言つて………拗ねないでください。」

（ミリアムかしら？それにしても魔王様が拗ねる？）

「マリアとの食事は毎日の楽しみなんだ。これからは一緒に食事を取れるように絶対調整し

ろ。」

「はあ、全く。そんなにマリア様が好きなら本当のことを全て話して仕舞えばいいものを、」

「まだダメだ。マリアが私のことを好きになってくれたとわかるまでは怖がらせるようなことはしたくない。絶対に嫌われたくない。」

「あなた本当に魔王なんですかね。」

（魔王様がわたくしのことを好き……!? なぜかしら……魔王様が私のことを好いてくれていると知ったら急に体が熱くなってきたわ……）

「マリア、そんなところで何をしてるんだ??」

「え、?」

いつの間にか執務室のドアが開かれ、目の前に魔王様が立っていた。

「あの、眠れなくて、ミルクを貰いに厨房に行こうとしてました……」

「そうか。ん?とても甘い匂いがするな。媚薬のような匂いだな。(リアめ、マリアに媚薬を使ったな)」

「甘い匂いです、か?リアが肌にいいと、使ってください、まし、た。」

「とても甘い匂いでそえられる。それはそうと、ずっとここにいて私たちの話を盗み聞きし





「ん、は、い。お願い、します……」

「ミリアム、後は頼む。」

「かしこまりました。良い夜を。」

「さあ、私の寝室へ行こうか。」

魔王は媚薬で力が入らないマリアを抱えて、自室へ移動し始めた。

「ま、魔王さ、ま。」

「ん？どうかしたのか？マリア」

「あの、セックスというものをするのでしょうか？」

「……マリアはセックスが一体どういうものか知っているのかい？」

「魔王、さ、まが下さった本で、少し勉強しました……」

「そうか、偉いね。まだしないよ。セックスは今のマリアの体には負担になってしまうからね。もう少し、えっちなことに慣れてからにしようね。」

「そう、な、のですか？」

「今日はマリアが気持ちいいと思うことしかないよ。あと、少しだけ、セックスの勉強をしようか。」

「勉強ですか……？わかりました……。」

リアに魔王の寝室だと場所は教えてもらっていたものの、中に入るのは初めてだった。マリアの部屋よりの広くて黒い。どこもかしこも黒い家具ばかりだが、魔王の匂いといっぱいで気持ちが高揚した。魔王は、マリアをシーツの整ったベッドの上にそっと降ろした。

「随分薄着で外に出たのだな。白い肌がピンク色に染まって綺麗だ。」

「ん、ありがとうございます……」

魔王は、テーブルの上に乗っているグラスをとって水を注ぎ、マリアに渡した。

「水を飲みなさい。少し落ち着くだろう。」

「ありがとうございます………おいしい、」

「さて、マリア。今からお前の体を楽にしてやろうと思うのだが、私がどんなことをしても、気持ちいいときは気持ちいい、と自分の気持ちを素直に教えること。私が言ったことはちゃんと聞くこと。約束できるか？」

「……はい。約束します。」

「いい子だ。」

大きな手がマリアの長い髪をさらりと撫でる。誰かに褒められたことのないマリアからすればこれだけで十分過ぎるほど高揚に包められた気分になるのであった。魔王は魔法で楽な服装に着替えて近くにあったグラスにお酒を注いだ。赤黒いワインを飲む姿は月光に

照らされて、艶かしい雰囲気を持っていた。グラスを置いた魔王はマリアの側に腰を下ろした。

「マリアは人間の国にいた時、恋人はいたのだろうか？」

「お恥ずかしい話ですが、恋というものをしたことがないのです。なので、こういったことも初めてで……」

「そうか。優しくすると約束しよう。おいで、マリア」

そういうと、魔王はマリアの方を向いて大きくて長い腕を広げた。マリアは迷うことなくその大きな腕の中に飛び込んだ。ぎゅっと力が入り、締め付けられるが程よい強さで心地いい。

「きゃっ!!!」

魔王はマリアの横腹に手を添えて、持ち上げ、自分の膝の上にポンと下ろした。

（初めてこんな近くで魔王様の顔を見たわ、とても綺麗なお顔……）

「マリアの瞳には金色が混じっているのだな、見つめていると飲み込まれそうだ。」

「ま、おう様の瞳も、とても綺麗ですわ……」

「そうか？ありがとうございます。」

耳元で目をつぶれと囁かれたマリアは、素直に従い、ぎゅっと目を閉じた。

（本当にいい子だな）

魔王は全て初めてのマリアを驚かせないようにゆっくり優しくキスをした。初めはただ触れるだけで、ちゅっという可愛らしい音になるキス。

「ん、」

「マリア、口を開けなさい」

何をされるのか不安で怖がっているのか、小刻みに唇を震わせながらほんの少しだけ開かせていく。魔王はその小さな口を啄み、どんどん深いキスを落としていく。

「ん、ふん、ふあ……ふううう」

（気持ち、いい、キス、きも、ちいい）

「マリア、深いキスをするときは鼻で息をするんだ。」

「ふあい……」

「さあ、もう一度やってみようか。」

「ふ、んんん、ふあ……んん……あふ、うう」

くちやくちやくと口内の音が静かな寝室に響き渡る。

（きも、ちいい……頭が真っ白になる……）

「上手にできるようになったね、マリア。緊張も少しほぐれたようだし、マリアの溜まった

その欲を発散させてあげよう。」

「ん……ふあ……」

キスに集中しすぎてマリアは気づかなかったが、いつの間にか服が脱がされ、胸が丸見えの状態にされていた。

「マリアはここも綺麗だね。」

（ん??ここ?）

魔王の視線の先に目をやると、自分の上半身が裸にされていることに気づく。

「きゃ!や、だ、あああ恥ずかしいです……!!」

「こら。隠すのはダメだ。ちゃんと腕を下ろしなさい。私の命令は聞く約束だろう?命令を聞けないならお仕置きするよ?」

（お仕置き……魔王様から嫌われるのは嫌っ、!!）

「う……はい。」

「うん、いい子だ。マリアの乳首はピンク色で可愛いね」

魔王の綺麗な指先がマリアの乳首をすりすりとお撫でる。媚薬で敏感になった乳首に電撃のような快感が駆け巡る。

「んああああ、だ、めえ」

「ん？気持ちいいだろう？」

「だめ、なのです……頭が真っ白になって……おかしくなってしまうのです……」

「大丈夫、私がちゃんと見ていてあげるから。これは気持ちいいということなんだよ。」

「き、もち、いい？」

「そう、マリアが読んだ小説の女性も気持ちいいというセリフを言っていなかったかい？」  
「確かに、言っていました……。」

「マリアが今感じている体の暑さは気持ち良くなって、絶頂しないと直らないんだ。マリアなら気持ちいいと感じることができると思うよ。」

（魔王様がいうなら、本当のことなのだろう……それに、あの本の女性のように感じるのか  
気になってしまう、）

「ん、はい……マリアを気持ち良くしてください……」

「いい子だ。」

魔王はマリアの乳首に顔を近づけ、長い舌で包み込む。もう片方は、指で刺激され、マリアは初めての刺激にびっくりするばかりであるが、魔王から与えられた快感をしっかりと受け取っているようである。

「ふあああ、つつ、んあう……ん、ダメエ、」

マリアが刺激に少し慣れたことを確認して魔王は口に含み、中でちゅぽちゅぽと吸いまくる。

「それ、ダメええええ、おかしくなっちゃう、！！！」

「気持ちいいだろう？」

「ふ、うん……きもち、いい……気持ちいいですうう！！！」

マリアが強い刺激にも快感を感じているのがわかると、歯で甘噛みし、もう片方も指先でコリコリと刺激してやる。マリアは与えられる刺激を一生懸命受け止めようと涙目になりながらも懸命に我慢している。というか絶頂がわからないのだろう。

（頭、真っ白になりそう……もう、何かきちゃう……）

「まあ、さ、ま……。何か来ちゃう、来ちゃうのおお」

「ん？乳首でいきそうなのかな？マリア、何か来ちゃいそうな時はイクって言ってごらん？解放させてあげよう」

「、い、く？いく、いくの！！！」

マリアがちゃんとイクと言えたのを確認すると魔王は、甘噛みと優しい舌舐めで絶頂まで導いてやる。マリアは焦点の合っていない目で一生懸命魔王を見つめ、体を震わせた。

「はあ、はあ……」



（すご、い……一瞬頭の中が真っ白になった……）

「上手にイケたじゃないか。怖くなかっただろう？」

「ん、は、い……。頭が、まっし、ろになりました……」

魔王は息を荒げるマリアを落ち着かせるためにゆっくり髪を撫でる。

「少し落ち着いたか？」

「ん、はい。」

「むずむずも少し落ち着いただろ？」

「ほんとだ……」

「さあ、スッキリするまでもう少し頑張ろうか。」

魔王はマリアをベッドに寝かせて、サイドチェアにグラスを置き直した。魔王は魔法でマリアの体を少し浮かせると、するりと下着を脱がせる。ピンク色に染まった肌が月光に照らされる。

「綺麗だ、マリア」

「ん、え、？ふ、服が……！？」

「ああ、脱がせてもらったよ。」

マリアが混乱して暴れないように魔王は、トロトロになったマリアの頭を優しく撫で、首

から足へ何箇所もキスをしていく。

「ん……ふあ……っん」

体をビクビクさせて、もう頭には裸で恥ずかしいという思考はなくなっているようだった。魔王のキスがどんどん下にいくにつれて、マリアは無意識に股を擦り合わせほんの少しの快感を拾っているようだった。そんなマリアの様子に気づいている魔王はマリアに気づかれない程度で口角を上げるのだった。

「どうした？マリア、ここが辛いのか？」

と、魔王はマリアの太ももをグッと掴んで、広げ、秘部が丸見えの体勢にした。マリアの秘部は月明かりに照らされてテラテラと光輝いていた。

「やっ……あ……見ないでえええええ！」

手で顔を覆い隠すマリア。

「マリア見てごらん？透明のつゆがマリアのここからたくさん出てるよ。」

「え、な、に……？つゆ？？いや、何これ……わたくし、何か病気なのですか……！？」

「ははは、病気とくるか。大丈夫、これはいいつゆだよ。マリアの体が気持ち良くなっていると教えてくれているんだよ。」

「気持ちいい……」

「そう、さっき乳首でたくさん気持ち良くなっただろう？だからここがたくさん濡れているんだよ。さあ、ここでもたくさん気持ち良くなってスツキリしようか。」

「ん……怖い、です……どうなってしまうのですか……？」

「大丈夫だよ、さっきみたいな快感が訪れるだけだよ。私が見ていてあげるから安心して絶頂しなさい。」

「はい。(さっきのような、快感……魔王様が見てくれるから大丈夫……それにこのむずむずを早く取りたい……)」

魔王は、マリアの手をとって、掴んでいたマリアの太ももへ移動させ、自分で持っていたと指示した。

「マリア、イきたくなったらどうするんだ？」

「イきたく、なったら……魔王様に、イきたいと教えます、」

「そうだ、これからずっと、気持ち良くなってイきたくなったときは私に教えること。さっきは初めてだったから好きなタイミングでいかせてやったが、これからは私に許可を取ること。マリア、わかったかな？」

「ん、はい……。」

「いい子だ。さあ、クリトリスで気持ちよくなろう。」